岐阜新聞掲載

ぎふの農業人
美濃・飛騨
2021.OCTOBER
Vol.22
JABANK PRESENTS・Farmer's voice in Gifu・

冬春イチゴだけじゃない 甘酸っぱい夏イチゴへの新たな挑戦

岐阜の豊かな自然の恩恵を受けて育つ農産物を伝えるシリーズの22回目は、恵那市でイチゴを栽培している「原農園」の原聡志さんです。原さんは54歳で脱サラし、ネット検索で偶然見つけたJA全農岐阜の「イチゴ農家研修生募集」のサイトをきっかけに農業の道に進みました。そんな原さんのイチゴ農家としてのこれまでの道のりや数々の挑戦を紹介します。

栽培への挑戦だけでなく、地域のイチゴ生産活性化にも取り組む

54歳で脱サラ 偶然検索したサイトを見てイチゴ農家へ

原聡志さんは、生まれ育った恵那市岩村町でイチゴを栽培しています。冬春イチゴをメインにしながら、一昨年からは夏イチゴの栽培も始めました。現在、取り扱っている夏イチゴの品種は「すずあかね」。冬春イチゴと比べると小粒で酸味が強く、生クリームを使ったケーキに最適な品種です。甘酸っぱい香りがして、食べた瞬間、甘さのなかにさわやかな酸味が広がります。

サラリーマンだった原さんは54歳で脱サラして地元の岩村町に戻りました。当初は花を育てたいとの思いから、花について勉強したり、実際に花屋をやっている人に指導を受けたりしましたが、その難しさに思い悩む日々が続いていました。そんな時に、JA全農岐阜がイチゴ農家を目指す研修生を募集しているサイトをインターネットで偶然見つけたのです。

イチゴを収穫する様子

原さんは大きな決意を胸に応募し、面接を経て「JA全農岐阜いちご新規就農研修所」の第1期生となりました。原さんを含め、県内外から集まった20代から50代までの4人の研修生が1年2カ月の研修を受けました。

研修を経てイチゴ農家となった原さん。ハウスの中の設備を自分で作るなど地道な努力によって、最初の2年間でイチゴ農家としてやっていけるだけの数量を確保したのです。

現在は冬春イチゴを20アール、夏イチゴを4アール栽培。冬春イチゴの10アール当たりの年間収穫量は4トンを超えます。夏イチゴの栽培で一番重要なのは暑さ対策。1年目は井戸水をイチゴのクラウン（イチゴの生長点が集中する株元）に流し込む手法を独自に考案。2年目以降は気化熱を利用したポット栽培に変えるなどして、よりよい栽培方法を模索し続けています。

イチゴ栽培は無理と言われた土地で数量確保 恵那市の生産者組合まで設立

自宅近くの圃場でイチゴ栽培を始めたころ、周囲からは「この土地でイチゴは作れないし、収益も上げられない」と言われました。そんな状況でも試行錯誤を続け、これまでに「章姫（あきひめ）」、「紅ほっぺ」、「やよいひめ」、「とちおとめ」、「美濃娘」、「よつぼし」の6品種について冬春イチゴを手掛け、数量も確保してきました。夏イチゴを作ろうと思ったのも、冬春イチゴの栽培で自信を得られたからです。

恵那市のイチゴ生産農家の戸数と栽培面積は、06年の2戸20アールから16年には6戸53アールまで増加しました。2017年には「恵那市いちご生産者組合」が発足、原さんは組合長に選ばれました。品質向上や担い手育成を目的に設立された組合で、原さんは「恵那市内のイチゴ生産は伸びしろがある。組合設立が恵那市のイチゴ生産者の将来に向けた大きな一歩となるよう、組合の発展に励みたい」と意気込みを語ります。

組合の事業計画には農薬を使わない最新の防虫技術の導入などが盛り込まれ、組合の農家の多くでその技術を活用。原農園では、イチゴ栽培の天敵といえるアブラムシを駆除するために、アブラムシを食べる蜂をハウスの中へ放つことにより、駆除を行っています。

スリットの入った通気性の良いポット

67歳となった今も健在 イチゴ栽培への挑戦は続く

「昨年はこのやり方でうまくいったということが次の年はうまくいかなくなる。イチゴの病気や害虫にも悩まされる」と原さんはイチゴ栽培の大変さを語ります。67歳となり、引退が頭をよぎることもあるそうですが、「イチゴ栽培にこれまでさまざまな挑戦を続けてきたし、自分が育てたイチゴを楽しみにしている人たちが励みになっている」とやりがいを実感。オリジナルのイチゴジャムを生産・販売したり、イチゴ狩り体験なども行っています（現在はコロナ禍で休止中）。「うちのイチゴは完熟度を売りにしている。これからも販路を広げていきたい」と目を輝かせ、これからも挑戦を続けていきます。

JAひがしみの 営農部 農産営農専門指導員
篠ケ瀬 かりん さん

恵那市内のイチゴ生産者は徐々に増えてきています。現在はコロナ禍で訪問に関して気を遣う状況ですが、普段の訪問活動を通じて生育状況や病気の発生状況などを把握して生産者の方に的確なアドバイスを行うことや補助事業の活用支援など、イチゴ生産者の皆様を少しでもサポートできるよう心がけています。

私はJAに入って今年で3年目となるのですが、原さんは1年目に初めて担当を任された生産者の方で、分からないことがあればいつも原さんに相談しています。原さんは、品種の選定だけでなく栽培方法にもこだわり、毎年より良い方法を求めて挑戦を続けてみえて、周囲のイチゴ農家の人たちにとってお手本となる存在です。

JAに入る前は、JAひがしみの管内にこれだけのイチゴ生産者の方がいて、さまざまな品種を作っているということを知らなかったので、今後は、もっとJAひがしみのイチゴをPRしていきたいと思います。

本広告に関するご意見・ご感想をお聞かせください

「かしもトマトジュース」2本&「ひがしみのカレー」2パックをプレゼント

加子母の桃太郎トマトを使ったトマトジュース。一滴の水も加えずトマト本来の甘味と濃い旨味を堪能いただけます。「ひがしみのカレー」は、1袋に約100gの飛騨牛が入った贅沢カレー。熟したトマトをベースにした本格カレーです。

①郵便番号・住所 ②氏名 ③電話番号④紙面に関するご意見を明記して下記の方法でお申し込みください。
【はがき】〒500-8577（住所不要）岐阜新聞社 営業局「ぎふの農業人」係
※個人情報は賞品発送において使用し、適正に管理します。※当選者の発表は、賞品の発送（翌月予定）をもってかえさせていただきます。

抽選で5名様にプレゼント present

10/15(金) 必着

耕そう、大地と地域のみらい。

JAバンク 岐阜県下JA/JA岐阜信連
JAぎふ / JAにしみの / JAいび川 / JAめぐみの / JAとうと / JAひがしみの / JAひだ
── 岐阜県下JAは農業のメインバンクです ──